

中支

中支で戦った初年兵

大阪府 岡田 睦彦

―入営は何時頃で、留守家族の状況は如何でしたか。

私は大阪市の西成区中開というところで、大正十二年九月十六日生れ、父は三十五歳で亡くなり、家族は母・祖母・弟三人と末の妹です。祖母は昭和十八年に亡くなりました。

昭和十八年の徴兵検査では甲種合格、十九年一月、大阪の歩兵第三十七連隊留守隊へ入営しました。しかし、その時は次弟が海軍に志願していたので、留守は母と十歳代の弟たちと幼児の妹だけで、心配が無いわ

けではないが、もうその時期は、日本軍も各地で苦戦を重ね、押され気味でしたので、自分の家のことなど考えていられなかったわけです。

入営後の教育は十日間で、銃や被服の手入れ、整理整頓、初歩的訓練、行軍程度でした。家族との面会は一度だけあって、門司から出帆、釜山から列車で朝鮮経由で、山海関を越えて中国に入ったのです。万里長城を後にして、天津―木甫から揚子江を渡って南京へ着き、今度は船で揚子江を、安慶―九江と遡って行つたが、九江で初めて米戦闘機の空襲を受けました。その頃は、制海権も制空権も段々と敵の手中にあったようでしたから、ここまで空襲が無かったのは幸だったといえます。

―勤務地と編入部隊について話をしてください。

九江から更に遡って湖北省の武昌―揚子江の北岸の漢口へ上陸した。武昌・漢口・漢陽と揚子江河岸の三都市が武漢三鎮といわれている、と聞かされましたが、漢口の時計台が今でも記憶に残る程度で、初年兵の私には、何処が何処だか判らず、無我夢中でした。

漢口から二〇キロぐらい歩いて着いた部隊が「松部隊（第六十八師団）」ですが、初年兵なので、ついに行くのが精一杯で、その場所は何という所か一寸忘れてしまいました。

とにかく、元中国軍の兵舎のような所で、塹がめぐらされ、その中で相当厳しい初年兵教育を受けたのですが、私も若かったので一生懸命頑張りました。教育が終わったのは四月頃だったかと記憶していますが、初年兵は各中隊に配属され、私は渡辺中隊で小銃分隊でした。

教育が終わると部隊は駐屯地から漢口へ、揚子江を渡って、しばらく南下、湘桂作戦のための戦闘準備や、訓練を重ねていました。いよいよ作戦参加となり、髪や爪を切り封筒に名前を書いて残留隊に残しました。

これからの戦闘は相当覚悟をしなければならないと、初年兵の私にもひしひしと感じられました。

出陣前に恩賜の煙草を一本ずつ頂き、これを吸って出発です。我軍に占領された長沙を通り衡陽へと前進、前進と進みました。衡陽までは石畳の山また山の難路でした。部隊によっては公路を行くのもあり、山路を行くのもあります。衡陽付近までは部隊は余り烈しい戦闘は無かったようでしたが、完全武装（銃・弾薬・食料・被服・その他）で重さ四〇キロを持ちたり背負い、毎日四十キロを歩く。行軍する者にとっては「早く戦闘が始まれば、一時でも休めるのに」と心に思いながらの辛い行軍の毎日でした。

いよいよ戦闘に入ったのは六月幾日頃でしたか、八月頃まで衡陽攻略戦は続きました。その当時は、戦況がどうなっているのか、部隊が、中隊がどういう任務で戦闘しているのか、衡陽が何時占領できるのか、敵の兵力はどうか等々、末端の兵隊、特に初年兵の私など知る由もないのです。ただ、古兵や分隊長、小隊長の命令や指示で、その日、その場の任務を行って

いるわけですから。一月に軍隊に入つて、直ぐ戦地、教育、作戦、戦闘と僅か半年余、今思えば無理も無い、記憶も定かでないのも当然というわけです。

―衡陽攻略戦は、中支軍が全力を挙げて参加したのですが、中国軍は文字通り死守を命ぜられていて、軍司令官以下退却することが出来なかつたのです。また兵力も、日本軍の包囲網を更に中国軍が包囲し、これを更に日本軍が包囲するという大激戦でした。松部隊も嵐部隊（第百十六師団）も大犠牲を払つて陥落させています。岡田さんは、中国軍降伏の瞬間に突撃隊となつていたようですよ。

衡陽攻略は悲惨でした。敵陣は小高い山で、その際まで進んで、いよいよ攻撃する。各部隊それぞれ分けて、その時私は第三分隊で小銃隊でした。山を登る途中突撃前に、私の脇にいた兵長の人の頭に弾が当たり、ものもいわずに倒れました。頭から水道の栓をひねつたように血が吹き出し戦死されました。

ところが、突撃直前、中隊長から「突撃中止」の命

令が下りました。それは、敵陣から白旗をかけた軍使が降りて来たのです。「戦闘止め」で、山を占領するため登つて行く途中、中隊の古参兵が亡くなつてた。死体を収容するのだが、暑さのため死体は腐敗し顔形も判らぬ、ふた眼と見られぬような状態で、口に出して言えぬような悲惨な姿でした。戦闘で戦死しても、収容に行けぬような激戦が何日も続いてたわけです。

私たちは、全員で敵陣のある山へ登つて、手を挙げて降伏した兵を俘虜にしました。山の麓の民家の中には、中国の負傷兵がそのままに横にして寝かされていましたが、その人たちはその後どうなったのか判りません。戦後聞いた話では、衡陽の軍司令官は逃亡し、戦後旧日本軍の人たちと交流し、お互いに敵軍の健闘を讀え合つたと聞いています。

―松部隊は衡陽攻略後どうされましたか、岡田さんも戦闘経験が浅いのに良く無事でしたね。若し、敵軍の降伏が数分遅れていたら、突撃したわけで、まったく軍隊は連隊だと、つくづく思います。

衡陽攻略後、部隊は桂林の方面へ南下していったのですが、松部隊は反転し占領地の確保や警備、討伐などしていました。その間にはマラリアにかかったりし、その後も時々発病して苦しんだりしました。

その間に、若い補充兵が入って来て、私は擲弾筒分隊員となっていた。補充兵に対して古参兵は随分厳しくしていました。「食事後の飯盒などの洗い方が悪い」などと言って、我々に「補充兵を叩け」という。私は叩くのはいやなので、いやいやながら叩く。古兵は今度是我们たち同年兵に「そんな生半可な弱い叩き方では駄目だ、こう叩くんだ」と逆に叩かれたこともある。

古兵の中でも訓練中、岩崎上等兵には可愛がつて貰ったが、もう一人の兵長には相当いじめられ、今でも頭の中にこびりついている。戦後の話だが、阪急電車でその兵長に会った。向こうは顔をそむけていた。私も済んだことだし、戦後のことなので何も言わずにそのまま別れた。

衡陽戦後、警備地名など細かいことは忘れましたが、小高い陣地で歩哨に立っていた時です。夜明け頃で、

もう朝だから大丈夫だと思っていたら、敵が下からはい上がって来る。私はパッと見つけ「敵襲！」と大声で叫んだ。古参兵たちも直ぐ来て、小銃や軽機関銃を射ち、バンバンやって敵を撃退した。占領地であつても敵の中の点にすぎない、ということをお教えられ、少しでも油断すれば、自分たちがやられてしまう。戦場ではこんな経験の一つずつ積んでいくのだと知った。その後、敵襲はなくなったのです。

また、討伐でしたか、作戦中でしたか、占領した陣地を二、三人で守っていた時です。良く見ると、すぐそこまで敵兵が登って来るので、本隊へ連絡したら「退れ」という命令でその陣地を退った。後から、雨霰と弾を射たれながら中隊へ戻ることが出来た。足もとへ土煙は上がるし、ピシ、ピシと弾が身近をかすめる。前からより、後からの弾が恐ろしいと思った。その後、その陣地を占領されたか、奪回したかは判らない。

―戦闘ばかりではなく、病気や、食料や、内務での御苦労話を。

ある陣地で警備していた時、後方から食料が補給さ

れないので、民家から米や鶏・家鴨・黒豚などを徴発する。しかし野菜が全然ないので栄養が偏り、私も顔が浮腫んでお多福のようになり、眼も見えなくなり陣地を降ろされた。その時、また古参兵に怒られ帯革で叩かれた。経験者でないと言らないが痛いですね、とにかく帯剣や弾薬盒を通す太い帯革ですから。特に体が弱っている上にマラリアにも患っているのだから本当に辛かった。

マラリアで髪の毛も薄くなり抜けてくる。初めは物凄く悪寒がして震えが止まらない、その次は四十二度にも熱が上がる、自分では判らないが「ウワ言」を言っていたと戦友から聞いている。

作戦中、澄んだ溜り水があったので、生水を呑んだ、そのため伝染病にかかり、骨と皮だけになった。鏡が無いので水鏡に写して見て、自分でもびっくりした。だけど私は気力でそれを癒すことが出来たと思う。

昭和二十年一月十九日、湖南省来陽県寧墳塘西方の戦場で左手擦過銃創で、患部の肉を弾丸でえぐり取られた。これも一センチ内側だったら左手はもぎ取られ

ていた。これも幸運でした。

―来陽県での負傷証明書を見ますと、岡田さんの部隊は、南部粵漢線沿いを占領警備しており、第二十七師団、第四十師団の、南部粵漢作戦に協力していたようですが、その後の新編成部隊へ転属された時の状況を話して下さい。

粵漢作戦や来陽付近では、敵襲や空襲が度々ありましたし、占領した飛行場には木製の偽飛行機があったことを記憶している。

四月になって、独立混成第八十四旅団が編成されたため、私たちは同年兵たちと一緒に転属することになりました。旅団の警備任務は「粵漢鉄道とそれに沿った公路の警備と飛行場及び重要軍需物資の確保」で、地域は衡陽の南方約六十キロの来陽という街から、湖南、広東省境までということだったといわれます。

私はその旅団の独立歩兵第五百十四大隊（震動第一七八七二部隊）へ転属して、駐屯地区は、資興県東江という所でした。そこは、今地図で見ますと、粵漢鉄道の郴県から東北東約二五キロぐらいの所で、南北か

ら山が迫っている所で、中支というより、南へ五〇キロも下れば広東省で南支那という所でした。

前にも申したように、広東省の飛行場を占領したり、鉄道を無疵のまま確保したり、連合軍の広東省沿岸上陸を防御するための、南部粵漢作戦、三南作戦が、南支で行われていたので、我々の部隊に対しても、激しい空襲や敵の反攻があったわけです。

新部隊へ転属の前後だったと記憶しますが、上官の青木伍長から、下士官候補になることを勧められましたが「私は長男なので辞退いたしたい」と申し上げた。中隊では、その頃、韓国の人がいて、成績が良い人だったので、私も負けないように頑張り、一年で一選抜の上等兵、続いて兵長へと、彼と共に進むことが出来ました。そんなことで、下士官候補の白羽の矢が私に当たったのかも知れません。

—新部隊が編成されてから、半年もしないで終戦というのですが、終戦後はどうなりましたか、また何時頃復員することが出来ましたか。

私が警備していたのは、東江付近なのでしょうが、

細かい場所名はもう記憶にありません。まさか敗戦だなど思ってもいなかったので、気力が落ちてしまいましたが。私は、以前には中隊長の当番を、続いて部隊長の伝令や炊事をやっていたので、同年兵よりは或る程度恵まれ、また任務の重さを感じていました。

駐屯地を出発して山の中を北へと行軍しました。負け戦になると住民からも馬鹿にされながら、石を投げられながら、十月の下旬に江西省都昌縣都昌付近に着いて駐留したのです。山の中に藁葺の家を作り、そこでも部隊長の当番をやっていました。

糧秣は、日本軍の米などを逆に中国軍から支給を受けるのです。それに大根など受領に行くのですが朝出て夕方帰る一日がかりです。途中食物が無いので泥水を飲んだりしながら、水腹も一時ということでした。

米が少ないので大根を切り干しにしたり、山へ行ってわらびや山草を採ったりで、飯の量を増やしていたので、毎日が空腹でした。

空腹の話になると、初年兵の時が思い出されますが、とにかく腹が空いて仕方ない。私も恥ずかしいことだ

が、一番早く飯をかき込んで、班長の食器を洗いに取りに行く、その食べ残りを食べて空腹をしのいだ思い出がある。

終戦後の生活も空腹の連続でした。しかも、食べる物も食わずに、復員間際に何人かの人が死んでいる。戦闘が終わっても家にも帰れず本当に可哀想で、気の毒なことでした。

復員の命令が出て都昌を出発したのは昭和二十一年五月ですが、一ヵ月後に上海から出帆し、六月二十六日佐世保上陸ということになります。しかし、湖南省の南瑞から、敗戦の身を列車にも乗らずに歩くこと一千キロでした。

ここに部隊長の賞詞がありますので読んでみます。これは戦闘中のことでなく戦後復員までの間のことです。

賞 詞

右者昭和二十年八月復員下令後炎暑ノ下萬障ヲ克服シツツ延々一千軒ニ亙ル長遠ナル行軍ニ堪ヘ克ク

集結地ニ到着セリ之平素ヨリ上司ノ意圖ヲ體シ自ラ積極的ニ體力ノ練成ニ努ムルト共ニ堅忍持久ノ精神ヲ涵養セル賜ニシテ茲ニ賞詞ヲ授與ス

昭和二十一年三月十日

独立歩兵第五百十四大隊長

陸軍少佐從六位勲五等 本谷 孫一

佐世保から列車で大阪の家に帰ったのですが、弟は戦死していた。遺骨箱の中には何も無く、紙切れが一枚だけでした。海軍でするので文字通り「水漬く屍」海の藻屑となってしまうのでしょうか。

家族の他の者は無事だったのが何よりの喜びでした。私も二年半の軍隊生活、戦地生活でしたが、入営してから復員まで初年兵で通し、無我夢中、ひたすらに戦務に励んだつもりです。苦しかった中にも、命を永らえ、本日あるのは幸せであるが、半面不公平も感じる、今でも軍隊は運隊なのか。

―長時間、初年兵の戦地勤務、軍隊内部の御苦勞話、有難うございました。